
40人の勇者様！

虚灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

40人の勇者様！

【Nコード】

N9028M

【作者名】

虚灯

【あらすじ】

私、ルーフこと明槻 真幌には、ちょっとした秘密があります。それは、魔術が使える、ということ。いわゆる魔術師です。

・・・でも、クラスメイトたちは全員知ってますけどね。

夏休み直前の今日、いつものように先生のいない隙を見計らって、魔術を使っ

て遊んでいたのですが・・・気がついたら、見知らぬ場所。よく知る顔も一緒に居たから混乱はしなかったけど・・・

オロオロとしていたら美人さんが現れて、「こんなに大勢、どちら

が本物の？ 前例が・・・ええい、このさいどうでもいいわ・・・
どうか、魔王を倒して下さい！」・・・はい？
異世界チートものです。

募集について。

皆さんこんにちは、こんばんは、おはようございます。虚灯です。
募集についてです、はい。

さすがに40人もキャラクターを考えられなかったので、募集したいと思います。

応募用紙

本名：（ハーフだったりしない限り、日本人らしい、漢字でお願いします）

よみがな：（ひらがなです）

あだ名：（カタカナ2〜4文字程度。バリエーションを付けてもいいです）

偽名：（あだ名・愛名・ユイミヤ・姓1（下の名を振る）＝姓2（苗字を振る）をお願いします）

容姿：（これは西洋人風、あるいはアニメ風にして下さい）

性格：（なるべく詳しくお願いします）

属性：（基本的に炎、水、草、地、風、雷、氷、光、闇の中から一つ選んでください。

幻、操、消、創、無の属性がいい場合は、この中から一つと上の中からも一つです。

五属性を選んだ人が多い場合には、抽選となります）

武器：（名称と詳しい説明を書いてください）

部屋番号：（男子か女子か、1、2、3の中から好きな数字を。一部屋につき七人から六人です）

その他：（得意なこと、人間関係等。超能力者、魔術士は不可です）

あなたの名前：（このページに載せます。普段使っているユーザ名でなくても良いです）

ありがとうございました

上のをコピーして、感想のところをお願いします。

また、どんな登場の仕方になるか、どのような行動をするか現時点ではわかりません。

ご了承ください。

締切りなどはありません。32人（すでに出ているのが8人）集まった時点で終了です。

応募して下さり次第、ほぼサブキャラにはなりますが、順次本編に登場すると思います。

それでは、よろしく願いします。

部屋割り&キャラ主様

女子1班 ルーフ / 明槻 オリ 真幌

カーム / 笹水 オリ 涼

スマイル / 陣野 冥（夕日影さん提供）

女子2班 リン / 鈴宮 オリ 理奈

デিশー / 藤咲 初（夕日影さん提供）

女子3班 ティファ / 咲口 オリ 詩歌

スノウ／白亜 オリ 六花

ソレイユ／平谷 陽（レイさん提供）

男子1班 クル／玖月 オリ 巧

トリツク／河隼 東（夕日影さん提供）

男子2班 クリス／唯桐 オリ 晶

ミスト／朝霧 神楽（レイさん提供）

男子3班 リーディ／育島 オリ 義人

ピアス／岸谷 環（夕日影さん提供）

残り26人です！

募集について。（後書き）

12/9 本編との差異があったため、応募用紙を訂正しました。
教えてください、ありがとうございます。

12/19 性別のついで記述がなかったため、部屋番号のところに追加しました。

第一話

「やったあ、最優秀賞！」

「最後の最後に縁起がいいね」

「実力だろ、実力」

「団結力なら結中一だよ！ 体育祭の学年種目も一番だったし」

「ねえねえ、一本締しよーよ！」

「あ、いいなそれ」

結宮中学校、2・2の教室。合唱コンクールが最優秀賞で終わり、明日から夏休みということもあり、ほとんどお祭り騒ぎな状態。

このクラスは最近では珍しく、クラス全員が仲良しというこのあたりではちよつと有名な学級です。

つきあってる子達以外は、みんなあだ名で呼び合ってるくらいですしねえ・・・男女関係なしに。

で、私もその一人、明槻 真幌。愛称はルーです。はじめは、英語で幌を表す“ルーフ”だったんですけど、みんな呼びづらいついていうから省略されました。

このあだ名がまた、結構広まっちゃって・・・いまじゃ、真幌って呼んでくれる人、全然いない。

・・・まあ、まほろば・・・昔の言葉で“すばらしい場所”、なんていうのからとった名前・・・嫌いじゃないですけど、でも、ちょっと恥ずかしい！

「ねえねえルー、いつもの見せてよ！」

私の肩をつつつきながらそういうのは、リンこと、鈴宮 理奈。あだ名の由来は、苗字の鈴と、名前をローマ字書きしたときの R i n a から。

・・・この2・2の仲間達は、“師匠”以外で、唯一私の秘密を知る人達。何かって？ それは・・・

「・・・いきます」

私がそう言つと、みんなの視線が一気に集まつた。

・・・今日は、花にしましょうか。色々と、嬉しい日ですし。

「・・・白露と共に芽吹き、癒しと共に開くもの。祝福と共に、今この地をあざやかに彩る」

ちょうど私の頭上に、小さな光が生まれる。

本当は、こんな長い詠唱は必要ありません。ですがみんなの希望ですし、言つたからといって何か不都合が起きるわけでもありません。・・・私も、楽しいですしね！

「顕著せよ、咲きほこれ。
「ローワ・セルフイー芳華」！」

ふわあ・・・

教室の真ん中に、たくさんの花が現れる。よし、次は・・・

「流れ来て、過ぎ去つては巡るもの。今、またこの地に帰り来る」

花のある所に、また小さな光が現れた。みんなが、息を呑む。

「吹き揺らせ。
「イクス風」！」

今度は、光が風に変わり、花を優しく揺らし、教室全体に贈る。全員の手元に、美しい花が舞い降りた。

「へえ、芳華と風の組み合わせ？　同時に使えるもんなのか・・・
風を準備している間も、花は落ちてこなかったし」

手の中の花を見つめながらつぶやくのは、クレバーこと、玖月 巧。
たまにクレブとか、クレ、クルなどと呼ぶ人もいます。由来は英語
で巧智な、賢いなどの意味をもつ、cleverから。その名の通
り、かなり賢い人です。

「まあまあ、あんまり難しく考えないの！　すごく神秘的で、綺麗
じゃん！」

リンは、その肩に手をのせ、にっこりと笑う。どうでもいいけど、
かなりの美人さんです。

「さすがは魔術士ルーフ。友達に魔術士が居ると、こういう時に華
やぐ」

落ち着いた声でそう言うのは、カームこと、笹水 涼。由来はやっ
ぱり英語で、冷静を意味する calm。

他のクラスではクールとか、冷たいとかで近寄り難い印象なよう
ですが、2 - 2では、普通に接しています。カームが友達と言う人は
なかなかいないので、そう呼ばれる事が2 - 2メンバーの間では、
密かな自慢になっていたりも・・・。

さて、ここまで来て何か気がついたのではないのでしょうか？

・・・そう私、ルーフは、実は魔術士なのです・・・。

第一話（後書き）

カームは、女の子です。一応。

第二話（前書き）

今回は、短いです。

第二話

「ルー、なんか大技ねえ？」

「大技・・・ですか。えつと・・・」

唯桐 晶・・・愛称クリスト、もしくはクリス・・・にせがまれて、私はちよつと考える。

・・・大技って言うと、やっぱりアレですかね？ 見栄えもするし。だけど、少し罰当たりな気も。

・・・ただ、こればかりは詠唱を省略できないんですよ。異様に長いのに。

まあ、やってみますか。

「風よ、祈りの灯火よ。流れ、来たれ。光り輝け」

神霊術と呼ばれる超高難度の術・・・の、一つです。その威力は凄まじいもので、神々の奇跡に近いものがあるそうです。

本当に神様の力を使うわけではないのですが・・・でも、私の力ではその力の幻影しか、映し出せません。

「神代の昔から、この世を統べる者。私は、その祈りを此処に望む」
「おおっ！」

詠唱の途中なのに、もう歓声が上がる。なんで・・・ああ、足元が光ったんですね。・・・あれ？

この魔術、そんな効果ありましたっけ？

・・・ここで止めておけばよかったのに、と後で後悔することになります。厄介な事になってしまいました。

「一筋の光と共に、彼の者は舞い降りた。今・・・」ガガコンツ！
「・・・はい？」

・・・変な音がしたような。なんでしょう？

「ル、ルー！ 足元！」

足元・・・？ なんですか？ ちょっと下を見ると・・・そこには、真つ黒い穴？が。・・・でも、落ちませんね、私。

・・・なんか大きくなってません？

「え、ええ、えええ・・・？」

みんな、硬直してしまっているようです。

穴は、どんどん大きくなって、ついに・・・教室の床が全部、見えなくなってしまうました。

そして・・・

カシャンッ

・・・そんな音がしたかと思うと、みんなそろって落っこちてしまいました。

第三話

・・・落っこちて、一瞬にしてまた地面。

「きゃあっ!」

思わず、思いつき悲鳴を上げてしまった。

だ、誰か聞いてました? キョロキョロと見回したけど・・・みんな同じような状況。おしりさすったり・・・。

「・・・どこどこ?」

リンがつぶやいた。それは、みんな思っているに違いありません。

石造りの大きな、埃臭い部屋。床には複雑な魔法陣・・・魔法陣?

「魔法ツ?!」

思わず、またまた叫んでしまいました。・・・今度は、全員が一斉にこっちを見る。

私は、ちよつと顔を赤くしながら「(きつとなっているに違いない)パツと地面・・・床?に座り、陣の構造を“視る”」。

私の特技は、魔術の構造を実際に見ることです。陣みたいに実際に形になっているのはもちろん、形になっていない催眠系や、発動前の術の構成も分かります。

・・・今まではあまり使わなかったのですが、ようやっと役に立ちました!

「・・・召喚系？ でも、私達がその上に立っているってことは・・・」

「「召喚されたッ！」」

ひゃあっ！ ちょうど私の真横にいた二人が、そろって飛び上がった。

「異世界召喚だよ、勇者様かな！」

「いやいやいや、最近は魔王系もあるぞ？ そっちかも」

興奮した面持ちでいきなり早口な会話を始める男女二人。

「・・・えーっと。ティファ、リーディ？ ・・・何興奮してんだ？」

まわりの人に突っつかれ、ちょっと嫌そうに尋ねたクリス。

「・・・まあ、誰だって興奮している“あの”二人に話しかけるのは・・・私だってちょっと遠慮したいです。」

「いやいやいや！異世界だぜ？！普通興奮すんだろ！剣とか魔法とか魔王とか！ファンタジーのほとんどが異世界をモチーフに描かれたものだし！いうなれば本の中に入ったようなもの！憧れだろロマンだろ！」

「・・・とまくし立てるように言うのは、リーディこと、育島 義人本ばかり読んでるので、readからとってリーディです。・・・すごく博識、というか豆知識さん（？）なんです、が、ちょっと難点が。いえ、私はいいと思いますよ？ 個人の、それも好みの問題ですし。」

「だあーってさ！普段とは絶対違う体験が出来るんよ！魔物や魔族！剣や魔法でのバトル！魔法はいつも見てるけどさあ、こっちにはきつと使える人たくさんいると思うんだよ！ああ、ワクワクしてきた！」

「・・・私ののは、正確には魔術ですけど」

・・・ツツコミを入れても、聞いているわけが無いですね。ティファこと、咲口 詩歌です。歌がすごく上手いので、歌姫を意味するー（何処の言葉でしたっけ？）ディーヴァにしようとした、というかなるところだったのですが・・・

『ディーヴァなんて、語感が悪いじゃん！　　というか濁音が嫌』と言われ、てんでんとつたらティファに。

・・・別に、特に語感も悪く無いと思うんですけどねえ。

あと、なぜか歌をうたうとき、メロディーラインは歌わないそうで・・・。いつも、自分で考えたアルトパートを歌ってます。どんな曲でも。

最近では、同じく歌が好きなスノウこと、白亜 六花がメロディーを歌っています。・・・あ、ちなみに。六花がスノウになったのは、六花というのが、雪の結晶の異称だからです。

・・・少なくとも、私はそう聞いています。

さてさて、こうしている間にも、二人はずーっと会話を続けているのですが・・・正直言うと、何を言っているのかさっぱりわかりません。実はふたりとも、俗に言うオタクという奴で・・・。さっき言ったように、別に悪くはないですよな？

ギイ・・・

と、いきなり軋んだような音がして、みんながパツとそちらを見る。・・・扉、そういうええありましたね。当然ですけど。

めいっばい開かれた扉の向こう側には、かなり大勢の人が。
しかも、中世ヨーロッパ風、かなり高そうな（？）服を着ていま
す。

・・・なんか、すごく驚いて、困っていませんか？ 困惑している
というか。

困惑しているのは、こっちだって一緒ですけど。

「こんなに大勢、どちらが本物の？ 前例が・・・ええい、このさ
いどうでもいいわ・・・」

・・・どうか、魔王を倒して下さい！」

・・・はい？ 金色の髪の美人さんが、初めは独り言のように、そ
して最後の一文ははっきりと口に出すと、さすがのみんなも、呆然
としていました。

第三話（後書き）

・ ・ ・ みんなが呆然としている中で、微笑んでいる人達がいたとか、いないとか。

第四話（前書き）

ちよつと長め。．．．展開が変な上にあんまり進んでない．．．。

第四話

「・・・えっと、よく意味が「ストップだ、ルー！」きゃっ?!」

金色の髪の美人さんの言葉に答えようとしたら、リーディが後頭部に張り手をしてきました。

・・・さすがに痛くはなかったですが、すごくびっくりしたんですけど。

「（こっぴどいの交渉は任せる!）」

「（うわー、うわー。一度こっぴどいのやってみたかったんだよね）」

・・・えっと、ティファ、リーディ？ いったいどうしたんですか？

「なにが起きたのか分かるんだったら、教えるよ!」

クリスのもっともな意見。一斉に、みんな頷く。

「まあまあ、見ててよ」

楽しそうに笑いながら、ティファ。美人さんに向き直ると、ハキハキとした口調で尋ね始めた。

「はじめまして。王女様・・・で、あってますよね？私はティファ・シイカ・サクリード。」

こっちがリーディ・シフィート・イクシオンです」

ちよっ、なぜいきなり偽名?!

心の中で突っ込んでみますが、二人は楽しそうに、不敵に笑うのみ。

というか、よくとつさにそんな西洋風の名前・・・

・・・まさか、私達全員それを考えなければいけなかったり・・・しますか？

「まあ、よく私が王女だと・・・さすが、勇者様。改めまして・・・レインディア王国へようこそおいで下さいました。私はフィーレンシア・レスト・ユーケナⅡメウルス・ユイリスⅡレインディア、現国王陛下の二番目の娘です」

・・・なんだか良くわからない調子で三人の会話がトントンと進んでいったので、割合しましょうか。

さて、ここはなにやら豪華な会議室のようなもの。そう、王城の中です。

どうにも、私達にこの部屋を貸してくれるようです。ここ以外にも六部屋ほど貸して下さっています。

・・・本当は一人一部屋の予定だったようですが、さすがに四十部屋は無かった模様。それでも、一部屋で十人はゆづに暮らせるほど広いんですねー。

男女別部屋で、それぞれ六、七、七の三班づつに分けて生活する事になりそうです。男子も女子も全部で二十人いますからね。

で、さつきリーディとティファが美人さん・・・フィーレンシアさんに聞いてくれたことをみんなでおさらいしていたところです。

・・・おさらいというか、途中から誰ひとりとして話を聞いていなかったなので、話してもらわないと今後まずいことになります。

以下、箇条書きにしてみますと・・・

・ここ、レインディア王国は大陸で三番目に大きな国で、他に大きな国は大きい順から

南に小国二つ超えたところに位置するファムナード皇国、

遙か東の方向にあるメイトレン帝国、

レインディアより少し小さい、西隣のセンシアリイ共和国などがある。

・宗教は、光の神ノユークが精霊や人と共に世界を創り、その後世界を運営させる神々を創り出したというノユーク教が基本。

どの国でも、この教えが信じられている。というかこれ以外全く別の宗教が無い。

国によって、どの神が世界を運営しているかで意見が分かれている。

・名前の付け方は、名前・愛名^{まな}・出身地・名字の順。

愛名は神に愛される名で、普段は名乗ることも無い。相手の愛名を使って呪いをかけると、威力が高くなるため。

愛名を名乗ることは、忠誠あるいは絶対的な信頼を意味する。

父方母方、両方の姓を名乗り、二つの姓は「で繋ぐ。母方の姓が先。

子どもの姓は、基本的に両親の父方の姓のみになる。母方の姓が貴族、王族の場合はこの限りではない。

（エリス＝ミランダさんを父に、セシル＝イルミナさんを母にもつ子どもの姓はイルミナ＝ミランダになる。

ちなみに、イリス、ミランダ、セシル、イルミナは日本で言う佐藤、鈴木、田中、高橋ぐらい超ありふれた苗字）

地名にはまず出身地、その後は気に入ったところを「を使い追加可能。

出身地が判らない時はリステイトとおく。何も置かないこともできるが、名しか名乗れなくなるので、あまりしない。

地名のところのユーケナは王族、皇族に生まれたことを意味し、どんなに小さな国でも全世界共通につける。

・魔法はある。炎、水、草、地、風、雷、氷、光、闇の属性がある。属性は、先の七つを基本七属性、光と闇を神霊属性と呼び、ほとんどの人は基本七属性のどれかを持つ。

神霊属性を持つ人はほとんどいなく、特に「光」属性持ちだと、聖人などと呼ばれる。

自分の持つ属性の魔法が、一番やりやすい。また、全ての魔法は詠唱や魔法具、魔法陣などが必要で、事前に準備しておくことや簡略化することは出来ても、完全に無しでやることは出来ない。

属性を持たない、もしくは分からない魔法、人も存在し、そのへんは現在研究中。

・お金の単位はミル。大陸共通。1ミルが5円くらい。

硬貨には銅貨、銀貨、金貨があり、それぞれ小さいのと大きいのと普通があるので、全部で9種類。

一番小さい小の銅貨が1ミル、大きくなるごとに価値が10倍になる。ちなみに大の金貨は1000000000ミル、つまり1億ミル。約5億円。

・現在、主たる王族は国王のバーソロミュー、その兄グスターヴァス、末の妹アナスターシャ、国王の長男ディミトリアス、長女アルテルミシア、次男フェルディナンド、次女フィレンシア、三女コンスタンティア、グスターヴァスの長男ベネディクト、長女エレオノーラなどがある。

「・・・と、いうわけ。本当は政治のこととかも聞きたかったけど、さすがにやめた。

あ、そうそう。ずーっと俺らに対応してたから、リーダーだと思

われたみたいだ。まあ、別に問題ないよな」

と、リーディが締めくくりました。・・・というか、多つ。

「よくそんな沢山聞いたね、というか聞けたね。」

・・・でもまあ、お金のこととか、名前のこととか、国のこととか、いずれは知らなきゃいけないし、いざって時に知らないと困るし。そのへんはナイス」

リンが、初めは呆れたように・・・後半は真面目な表情で言いました。

・・・でも、一つ気になることが。どうして・・・

私はまわりのみんなをこっそり見て、パツと目に入った“紅”を“投影”します。

・・・うん、出来た。今の私の色は、“紅”。

（フアムア “炎”）

頭の中で小さく思考イメージすると、指先に小さな火が点りました。

「やっぱり・・・おかしいですねえ」

私はこっそり首をかしげました。

「何がおかしいんだ？」

「ひゃっ！」

いつの間にか真後ろに来てたのは、クル。び、ビックリしたあ・・・。

「ん？ 今、無詠唱だったよな？ さっきのリーディの話だと、完全な無詠唱では、魔法は使えないはずじゃ・・・。
それとも、なんか違うのか？ “魔法”と“魔術”の差」

今私が悩んでいたのは、まさにそれ。さっきのリーディの説明、いくつか私の知識と違っていている点があったんです。

・・・話すべきか、話さないべきか。話すにしても、一体何をどう話せば・・・？

「おい、なんかルーが言いたいみたいだけど」
「ちよっ！」

全員の視線が一斉にこっちを向く。うつつ、恥ずかしいんですけど・・・。

「どうしたんだ、ルー」

カームが、そばに寄って顔を覗き込んできました。普段の彼女は、あまりしない動作。

・・・これは、話さないといけないっぽいです。

「・・・えっと、さっきのリーディの説明の中で、魔法のところで、気になったことがあって。

まず、属性のこと。私の知っているのでは、炎、水、草、地、風、雷、氷、光、闇のさらに上に幻、操、消、創、無があるんです。それに、属性の無い魔術はありません。

もう一つ、詠唱と魔法陣、魔法具について。確かにあったほうがやりやすいですが、それらはあくまで補助。無いとどうかする訳で

はありません。

・・・で、私、こう思っただです。

この世界って、私の使っている魔術ほど、魔法が発達していないんじゃないかって。

幻、操、消、創、無の属性が無いのは、見つかっていないから。

属性を持たない術や人が存在するのは、それらが最上位の五つに属するか、まだ解明されていないから。

補助が無いと魔法が使えないのは、効率の良い方法がわからないから・・・」

・・・あーあー。みんなぼかんとしちゃってます。

まあ、突拍子も無い話ですよえ・・・みんな、魔術について詳しくないですし。

「・・・ありえる。というか、ほぼ間違いない話じゃないか？」

え？ 腕を組んで呟くようにカームが言った。

「なーるほどねえ。へえへえ。・・・それは、これからいろいろと行動するのに、かなり都合がいいんじゃない？」

これから相手する人が魔法使いでも、ルーの魔術の方がずっとスゴいんですよ？」

「なあ、その魔術って俺らにも使えるか？ 良かったら教えてくれねえか？」

リン、クリス・・・

「なんか・・・楽しんでますよね？ 真面目に考えながらも、かな

り楽しんでますよね？」

「う」「え」

ニヤニヤと笑っていた表情で、カチンと固まる。

・・・付き合いは一年ほどですが、わからないわけじゃないですか。

というか・・・

「『これから相手する人』って、なんかもうみんな結構真面目で、状況をきっちり理解してますね？」

思わず呆れながら言うと、みんなはニヤツと笑って、言い切った。

「」「」「当然」「」「」

第五話

「で、えっと・・・それでは、魔力と属性の測定を致します。
勇者様方、こちらへ・・・」

・・・えー、フィーレンシア様、初めの『えっと』とあとの言葉、
かなり印象が違ったのですけど？
いろいろツツコみたい気分でしたが、とりあえず全員あとに続きます。

「（なあ、ルー）」

「・・・？（なんですか？）」

隣にいたクリスが、小さな声で言いました。

「（勇者様って・・・なんか恥ずかしくないか）」

「（・・・同感です）」

確かに、ちよつとこそばゆいですね。厨二クサイし。

「（それに、百歩譲って勇者様は良しとしても、勇者様方って・・・
言葉として、アリなのか？）」

「（う、うーん・・・）」

ごもつとも。と、そこに・・・。

「（じゃあ、団体名を決めればいい）」

「「うわっ?!」」

いきなりの乱入に驚くと、そこにはニヤニヤと笑うリーディ。びびっくりしました・・・。

「（そうすれば、勇者様方じゃなくて、そっちで呼ばれるだろ？

これ終わったら相談するか）」

クスクスと笑いながら、少し離れていきます。

・・・なんか楽しそうですね。

「では、魔力測定を始めます。それでは・・・ティファ様、この魔水晶に触れてください」

「この、って・・・この超巨大な球体？」

案内された部屋には、超巨大な水晶玉が。直径・・・1mぐらいですかね？

・・・私は、それよりもこの人の多さのほうが気になりますけど。やじうまですか？

ティファは、それにそつと触れます。

「・・・これで？」

「もう出ます・・・はい、魔力値A、属性は風ですね」

ざわっ！ 一気に場がざわめきました。

「なんと・・・Aとは」「宫廷魔道師並ですぞ・・・」

・・・というか、Aですか？

「あの、この測定値って、どのような段階があるのですか？」

「はい、Fが最低で、順にE、D、C、B、A、A Aがあります。Dが平均、Bで普通の魔道師並ですね」

すぐにフィーレンシア様が答えて下さいましたが・・・なんか、大雑把ですね。やっぱり技術の差が・・・。
えっと、私流に測定すると・・・。

「魔力値650、「風」属性ですね。確かに、魔力はちょっと高めですねえ・・・平均が100ですから」
「なっ・・・！」

いきなり、一気に人の視線が集まりました。特に、ローブにマントの人たちの視線が痛いです。
えっと、なんかまずかったですかね？

「もしや・・・魔力を目視出来るのか？」
「まさか！　ありえない。それに、値の表し方が違う」

特に大きな声でいうのは、白いマントに蒼の刺繍の服の二人。・・・
もしかして、魔道師さんですか？

「私は・・・というか、私の目はちよつと特別なんです。でも昔から見えているんで、大体の平均とかは判ります。

値は、それを元に自分で勝手に当てはめているだけですよ？」

「んなっ・・・！　ありえない！　魔族ならともかく、人の目が魔力を捉えるなんて・・・！」

ま、まさかお前魔族か？！　よもや勇者を騙って魔族などが侵入するなど！」

そのうちの一人、赤茶色の髪の男性は、私を睨みつけると、懐から

淡くひかる石を大量に取り出しました。
って、え、えええっ?! いきなり何を・・・

「レイミオ・レブン・サフィール」ラルフィス!

響き渡る声。あ、フィーレンシア様?

「勇者様になんということを! 異界の方なのだから、こちらの常識が通用しないなど、当然でしょう!」

「・・・申し訳御座いません」

「私ではなく、ルーフ様にです!」

バシツと言われ、軽く顔を歪める男性・・・レイミオさん。

「・・・なにか?」

フィーレンシア様もそれに気づいた様子で、高圧的、かつ不機嫌な様子で彼を見つめています。

うーん、こういう時、ホントに王女様なんだなあ、って思います。

「・・・この者たちが勇者など、何かの間違いではありませんか?」

その時、今までちょっと黙り込んでいた白マントのもう片方、藍色の髪の男性が静かに、しかししっかりと言いました。

それを聞いて、我が意を得たりとまた大声を張り上げたのはレイミオさん。

「そうです! こんな大量に現れたのもおかしいですし、ほとんど全員が黒髪黒目ですよ! 不吉すぎる。あの召喚術式は異界で魔力の高いものを検知し、呼び込むものです。検知するのは魔力だけ、

種族も何もわかりません。過去にも、人間ではなく獣の類を呼び寄せた例がいくつかあるじゃないですか。それを知っていた魔族が先に異界に紛れ込み、わざと高い魔力を放出させていたのではありませんか？　そもそも、この人数にしたって、観測された魔力の値が大きすぎると思っていたのです！　無意識に出している量にしては、多すぎる。

わざと魔力を放出させ、術式を引き寄せたのでしょうか思えません！」

そこまで一気に言うと、ゼエゼエと息をついた。

・・・ちよつと話に飛躍がありませんか？

「・・・なるほど、理にかなっています。過去の勇者様方の証言から、異界に魔法の類が無いことは証明済み。魔力を放出する機会も、その方法も存在しないはずですからね。

・・・しかし、それだけでこの方々が魔族だと断定するのは、少し飛躍がありませんか？」

「しかし！」

そこで、フィレンシア様はレイミオさんのセリフを遮るように、深くため息をつきました。

・・・というか、当人をほつといてそんな話、どうかと思うんですが。

変な疑いをかけられているようですし。こうなったら・・・

「あ の つ！」

ちよつと大声を出して、注意を引きつけます。うつつ、やっぱり視線が痛いです。

「私、ちょうど召喚されたときに、大魔術を使用しました。私達が喚ばれたのは、そのせいでは無いですか？」

「異界に魔法？！ そんなこと聞いたことも無い！」

すぐに反論するレイミオさん。・・・そんなこと言われましても。

「あまり、知られてないんです。今までの人達は、知らなかったんじゃないですか？」

私の住んでいた国でも、他に魔術士がいるという話は聞きませんでしたし、使える人自体が少ないんだと思います。

・・・ついでに言うと、私のは魔法ではなく魔術、正確には^{アウラ}気魔術です」

一気に場の雰囲気が固まりました。・・・まあ、信じられないでしょうけど。

「異界の魔法、いや魔術？ そんな話「レイミオ！」しかし王女様・・・」

「知られていない術があっても、おかしくはありません。

そんなに信じられないというのなら、実演してもらえばよいだけの話でしょう！」

凜とした声でフィーレンシア様がそう言うと、くるりと向き直って申し訳なさそうに言いました。

「こちらの魔道師は、この若さで宮廷魔道師に名を連ねるほどの実力者ですが、どうにも頭が堅いことで有名で・・・。

それで、よろしかったら是非とも勇者様方の魔法・・・いえ、気

魔術とおっしゃりましたか。ここで、見せて欲しいのです」

「え、ええ・・・私はいいですけど」

そう言うと、バツとみんなが一斉に私からちょうど円形に距離を取ります。それを見たフィーレンシア様。

「あら、ルーフ様が術の中心ですか？」

「・・・魔術を使うのは私だけです。そもそも、魔術が使えるのも私だけです。」

さっき言った『私達』というのは、私と、私の師のことです」

「馬鹿なっ！ たった一人であれだけの魔力を放出していただと？

！ ありえない！」

「レイミオ！」

またもや大声で言ったレイミオさん、フィーレンシア様に睨まれてしびる後ろに下がりました。

・・・後ろと言っても、輪の中では一番内側ですけど。

で、えっと・・・

「何にしましょうか？」

「ルー、ほらあれ！ 虹とか出る、『蒼き調べは』・・・なんだっけ？ 呪文がキレイで、私好きだな」

「『水』系統ですか・・・というか詠唱はいつも適当ですよ？ 覚えてないです」

「えー・・・」

残念そうにリンは口を尖らせました。

『詠唱は適当』のところで、レイミオさんがまた反論したそうでしたが、フィーレンシア様に睨まれて我慢したようです。

・・・なんか、詠唱考えるのめんどくさくなりました。
普段は、『次はどんな魔術にしようか？　どんな詠唱にしようか？』
って考えてるんですよ？
いきなり言われてもそんな、思いつきません。

ええい、もういいです。

（リスタ“水”、イクス“風”、ローワ・セルフィー“芳華”）

空中に小さな水球をだし、風で細かくしながら部屋中に拡散、花を
ふらせてみました。
めんどくさいので、さっきやったのと同じです。まあ、そ
れでもきれいだと思いますけど。

「ま、全くの無詠唱だっ！？」

またもやレイミオさん。喉が潰れちゃったりしませんか？

「それに三つの事象を同時に・・・一体、どの属性持ちなんだ？！」

・・・え、でも自分の属性じゃないとダメとか、ありませんよね？
そんなこと言ったら、私は魔術を一個も使えないことになりますよ。

「私の属性は「無」ですけど・・・あ、そういえばこっちにはない
んでしたね。上位と、最上位の5つ」

「「無」？！　聞いたこともないぞ！」

目を白黒させるレイミオさん。

「えーっ！ 昨日の説明だと、「無」って最上位だよな。ルーって実は凄かったんだ」

「なにいつてんだ、魔術士の時点でもう凄いだろ」

私の横では、クルとクリスがこそこそと話しています。

「あの、その上位と最上位の属性って、一体なんですか？」

「あっ！ おまえ、シオンとこの・・・また忍びこんできたのか？」

ぴよこんと輪の中から顔を出したのは、綺麗なまつすぐな銀髪に、桔梗色の目の女の子。

ゆったりとしたドレスを身につけているし、貴族ですかね？

「お姉さん、教えてください！」

「えっと、まず上位は二つに分けられて、低いほうが「幻」と「操」。「幻」は心を、「操」は物を操る属性です。

高い方は「創」と「消」で、これはその名の通りですね。

最上位は「無」、これは虚無の無であり、無限の無でもあります。すべてを内包し、すべてを否定する」

「へえ、じゃあ基本七属性と神聖属性は？」

「基本七属性は低位、神聖属性は中位と呼ばれてます」

「へえ・・・」

真面目な顔で聞き入り、うんうんとうなずいています。・・・どうでもいいけど、可愛いです。

「なっ、神聖属性が中位？！ 信じられん！ その5つの属性も聞いたこともない」

・・・さっきからそればかり言ってます？ レイミオさん。

「・・・というか、シルビア！　ここはお前みたいな子どもが来る
ところではない！

さつさと家に「私は、自分より強い人、もしくは徳の高い人にし
か従いません」くっ・・・！」

ものすごく冷たい、鋭い目で言い放ったシルビアちゃん。

・・・なんか、すごく大人びてませんか？

「兄さまに会いに来たら、あなたみたいな人に出くわすなんて・・・
今日はついてませんね」

ため息混じりに呟くシルビアちゃん。

「おい、それはどういう意味だ！　いくらシオンの妹、マリス殿の
娘だからって、俺に向かってそんな口の聞き方は・・・」

「じゃあ、また勝負しますか？」

睨みつけているわけでもなしに、こんな迫力出るんですね・・・。
しかも、こんなちっちゃい子が。

レイミオさんは、唇をかむと、うつむきました。

『勝負しますか？』の問でこうなるとは・・・実は、この子かなり
強かったりするのでしょうか？

「・・・お騒がせして、申し訳ありません。フィーレンシア様」

「いいえ、いいのよ。シオンなら、いつものように書庫にいると思
うわ」

「ありがとうございます。失礼します」

左手を胸に押し当てペコリと一礼すると、ちょこちょこと去って行

きました。

フィーレンシア様は、その様子を見て微笑みました。

「あの子・・・シルビア・メウルスⅡレブン・アイルファートⅡセシルは、宮廷魔道師を父、母、兄に持っていて、自身もとても魔法の才能があるのです。」

兄達の様子を見て育ったからか、普段はとても礼儀正しいのですが・・・今のうちに、特定の人達に対してはかなり冷たくて」

「・・・ずいぶんしっかりした・・・というか大人びた子ですね」

答えるのは、スノウ。それを聞いて、フィーレンシア様はクスクスと笑いました。

「将来は、宮廷魔道師になるんですって。確かに、最年少宮廷魔道師になるかも知れないと既に言われるほどの実力の持ち主ですよ。」

・・・ほら、さっきの礼も、魔道師の礼でしたし」

「・・・王女様、話がそれていますが」

藍色の髪の人が、そつと言いました。

「ああ、そうでしたね。」

・・・レイミオ、これで納得できましたか？ 一人で3属性の術を一度に操るくらいです、それはあれほどの魔力も出せるでしょう。それに、確かに黒髪黒目は珍しいですが、だからといって魔族と決まるわけでもありません」

しっかりと目を見据え、フィーレンシア様。

レイミオさんは、唇をかみながらうなずきました。

・・・一件落着ですかね？

第六話

「で、さてさて。さつきルーにも言ったんだが、何時までも団体名称が『勇者様方』でも恥ずかしい。

というわけで、なんか団体名を決めよう」

何がどう『さて』なのでしょう？　ここは、会議室です。・・・本当にそういう名前になったようです。

相変わらずリーディが仕切っています。・・・まあ、結構しっかりしてますし、適任といえば適任。

「・・・んなこと急に言われても」

「すぐには思いつかない」

カームとクリスは困ってます。たしかに、そうですよね。

「ほらほら、前にみんなのあだ名決めた時みたいに考えればいいんじゃない？」

「えー？　じゃあ、2 - 2だから・・・どうしょ？」

うーん。みんなで考えます。えっと、じゃあ・・・

「あだ名は、英語が元になってる人も何人かいますよね？　2 - 2、二年二組は英語で・・・？」

「第二学年は英語で『The second school year』だよね？　略して『TSSY』？」

「いやいやいや、それだと他のクラスも含む。2組は、『The second class』・・・？」

「『the』はつけなくていいんじゃない？　・・・てか、くつつ

けると長くなっちゃうし」

・・・決まりませんね。

「じゃあいつそのこと、『ユイミヤ』っていうのは？ 結宮中からとった」「それはダメ」・・・なんで？」

スノウが提案しましたが、リーディとティファに却下されました。
・・・どうしてですか？

「ああ、言ってなかったつけ。名前・・・というか偽名の出身地のところ、みんなそれで統一だから」

偽名って・・・身も蓋もない言い方ですね。

「だけど、ティファたちはこっちとちょっと違う言い方で名乗っちゃったじゃん」

「あれは愛名と出身地を略したものだと思われたらしいよ。初対面の名乗りではまず愛名は言わないし」

なるほど。でも、フィーレンシア様は言っていましたよね？

「ああもつ。決まんないから、まずはひとりひとりの偽名を先に考えちゃおうか」

「そうしよそうしよ。名前のところはいつものあだな、姓2つは先のを下の名前、後のを苗字を振って、愛名は適当ね」

えっと、じゃあ私はルーフ・・・愛名は、えっと・・・「無」の呪^ル語、^ル“ルインシア”にしましょう。

ルーフ・ルインシア・ユイミヤ・ホロウⅡアキツキ。・・・アキツ

キは変ですかね？ えっと、どうしよう・・・。

明が転じて灯、でグロウ、槻から月、でムーン・・・ルナにしまし
ようか？

くつつけて、グロウルナ・・・グロウナ、グルーナ？ どちらにし
ましよう？

「ねえ、リン。後の姓、グロウナとグルーナ、どっちがいいと思
いますか？」

「んー・・・グルーナかな」

とすると、私はルーフ・ルインシア・ユイミヤ・ホロウ＝グルーナ、
ですか。

・・・やっぱり、長いですね。まあ、しょうがないです。

「・・・決まった？」

と、肩をつんつん突っつかれ、振り向きました。

・・・ああ、スノウですか。

「ええ。そういうスノウは？」

「愛名が決まらないの・・・どうしようかな？」

うーん・・・じゃあ。

「見たところ、スノウは「氷」属性のようなので、その呪語からと
って“トーラ”はどうですか？」

「・・・ルーン？ って、ファンタジーとかによく出てくる魔術言
語の事？」

スノウは首をかしげます。・・・まあ、ちょっと違いますけど・・・

「だいたいそんな感じですね」

「そう。じゃあ私はスノウ・トーラ・ユイミヤ・リツカハクアか。うん、いい感じ。ありがと、ルー」

「どういたしまして」

。・・・姓はそのままなんですネ。いいな、擦らなくても自然で・・・。

「ルーは、どんなのになった？」

あ、リン。

「私はルーフ・ルインシア・ユイミヤ・ホロウグルーナにしましたよ。リンは決まったんですか？」

「もちろん。リン・フィート・ユイミヤ・ライナパールスって、どうかな？」

パールス・・・『Palace』ですかね？ 宮殿とかの意味の。ちょっと音が違うような気がしなくてもいいですが。

「いいんじゃないですか？ パールスじゃなくてベルズとかでもいいと思いますけど」

「んー・・・でも、やっぱりこのまんまがいいや」

そうですか。まあ、語呂の問題もありますし。

「あつ、ひらめいた」

と、いきなりリンが手をぽん、と打ちました。

・・・どうしたんですか？

「おーい、みんなっ！ こっちちゅうもっく！」

なっ、何をいきなり大きな声を？！

その言葉のとおり、一気に全員がリンの方を見ました。

「さっきリーディが言った総称なんだけどさっ、 “プレッジ” なんてどう？

結宮の結はそのまま結ぶだけど、宮は神社とかの意味もあるよね？ 神社で結ぶといえば、結婚。

で、大昔は結婚を契りとも言ったから、それを英語で『pledge』。誓いとかの意味の単語だし・・・

・・・ね、いいと思わない？」

ああ、なるほど。音もいい感じですし、私はいいと思います。

「いーじゃんいーじゃん！」「あたしは賛成」

がやがやと、みんなも同意します。

「ん、よし。じゃあ俺らは今日からプレッジだな」

第六話（後書き）

何だかグダグダですみません・・・。
募集&感想をお待ちします！

第七話

「で、俺達は何をすればいいのでしょうか？」

現在、いわゆる謁見の間、です。目の前には国王のバーソロミューさんが。

王様はやっぱり金髪で、意外と若い方でした。といっても、40ぐらいはいつてそうですか……。

本来ならプレッジ全員で会う様な展開——（ってリーディとティファは言いました）ですが、さすがに40人で行くのも大変、ということで、代表と言うことになっているリーディ、ティファ、それにさつきたくさん話した私が行くことになりました。

「簡単に言ってしまうと、魔王をどうにかして欲しいのだ」

「どうにか……とは？」

絶妙な返し。向こうにいたときも、こんな感じでしたね。大勢の前でも物怖じしない二人。

部屋の壁際には、たくさんのお偉いさん方がいますのに……。

「始めは、もう1000年も前の話なのだが……長いので、飛ばそう。魔王を名乗る輩が、魔族共をまとめ、人里に軍をよこすのだよ。」

始めは辺境の村などが被害にあっていたのだが、最近ではある程度の規模のある街にまで勢力を伸ばしてきていてな。

ここから西へずつと行ったところにあるとある洞窟……洞窟と言うには大きい穴に、魔王が居ることは判るのだが、用心深いやつなのか、その近くも内部もトラップだらけ。

どんな大軍を送っても、誰ひとりとして戻って来なかった。

そこで、周囲にどのような罾が仕掛けてあるのか調べたところ、魔力に反応して動く罾が縦横無尽に張り巡らされておった。

今までの兵は、ほぼ全員これにかかっていた事も解ったのだよ。

この罾がまた厄介な代物で、魔力の質と量が一定値を超さないと、誰でも一瞬にして塵と化す。

魔族にとつては少し低めの値だが、人間であつたならば、大魔導師と呼ばれるような者しか突破できん。

そこで、異界より勇者を呼び寄せ、その洞窟を突破しようというわけだ」

・・・省略しても長いんですけど？　　というか、そんなところ行ったら死んじゃうのでは。

それに、最後の『そこで』と『異界より』、が繋がっていないような気がするのですが。

「召還魔法を使えるのは五十年に一度、そしてその魔法陣を所有している国は5つ。なので、十年ごとにそれぞれの国で勇者を喚ぶ決まりになっている。

毎回その勇者は洞窟へ行き、惜しいところまで行くのだが、異界の住人を死なせてしまうわけにもいかず、止めまではいけずにいたのだ。

1年以内に返還の間にて魔法を使わないと、勇者は元の世界に帰れなくなるのだが、勇者の活躍により減衰した魔族軍が元の勢力を取り戻すのも、9年ほどかかる。

なので、今までは一進一退、あまり進歩が無かつたわけだ。

・・・しかし！　今回の勇者は今までに例を見ない大人数。たとえ止めを刺すところまではいかずとも、次の勇者召喚までに魔族共が回復出来ない程度には痛手を与えられるはず！

どうか、どうか勇者様、魔王を倒して下さい！　今年を、魔王の最後として下さい！」

王様が頭を下げると、まわりの人達も一斉に頭をたれました。

・・・なんだか、いきなり怖くなってきたしまいました。私達で、大丈夫なのでしょうか？

心配になつてちよつと前の二人を見ると・・・なんとまあ、笑つてます。

「ええ、ええ。約束しますよ、国王陛下。私達が、終わらせてみせます」

「次なんて、もう考えなくてもいいように。誓いますよ、陛下。俺達、プレッジの名に賭けて」

自信満々に、言い切った二人。・・・ええ、そんなふうと言つちやつていいんですか？

・・・まあ、私も当然、最善を尽くしますけど。

気がついたら、私も笑っていたのです。

第八話

「っはあ・・・」

王様に会った後、すぐに自分の部屋に行き、深くため息をつきます。

そのまま、無駄に豪華なベットに倒れこんでしまいました。

「ルー、どーしたの？」

「王と会うのは、そこまで疲れるのか？」

同室のカーム、スウちゃんが心配そうに覗き込んできます。

疲れるって・・・そんなもんじゃ無いですよ。さっきまでは二人に気圧されて、気づきませんでしたけど・・・

今思うと・・・なんて威圧感！ ああ、緊張で死ぬかと思いました。こういうことに何故だかこなれた様子の二人はともかく、私はっ、私は普通の中学生なんですからねッ！」

「・・・ルー、全部声に出てる」

「はうあっ?!」

し、しまった・・・。

「あはははは、ルー変な声」

お腹を抱えて、スウちゃんは大笑い。今の何がそんなにおかしかったのでしょうか・・・？

スウちゃんは本名陣野 冥、スマイルとも呼ばれています。

セミロングの髪をサイドテールにしている、とても小柄、向こうではたまに小学生に間違われたりしていました。

常に明るく笑顔、かつポジティブシンキング。暗い事を考えてるスウちゃんなんて、考えられないです。

少し幼いところもありますが、無邪気な感じで私は好きですね。

お姉さんのな人に憧れる傾向があり、カーム、ティファとかと仲がいいです。

ついでに言うと、こっちでの偽名は確か・・・『スマイル・ラーヴ・ユイミヤ・プルート』フォーメ』でしたっけ？

多分、『プルート』は冥から冥王星を意味する『Pluto』、『フォーメ』は陣野から陣営を表す『Formation』から・・・だと思っんですけど。

まあ、聞いてみていないので、合っているかどうかは分かりませんがどね。

ガチャ

と、考え事をしていると、扉が開く音がしました。

「みんな、リーディとティファが会議室に集合だって」

誰かと思ったら、スノウですか。そういえば、スノウはティファと相部屋でしたね。

はいはいっ、すぐに行きますよー・・・。

「この中で、喧嘩に自信がある人いる？」

はい？ いきなりの問に、みんな目が点になっています。来るなり

これですか？

「いきなり呼び出されたと思ったら、一体なんなんだ？　まずは事情を説明したまえ」

ぴ、とメガネを押さえながら、少し偉そうに言うのはディシー。でも真面目でいい人です。

長い髪にノーフレームのメガネと、見た目からして知的ですね。だけど、足も結構速いんですよ？

トレードマークであだ名の由来でもある電子辞書を今日も抱えて・・
って、ええっ？！　持ってきてたんですか？！

「ああつと・・・そうだな、まずはさつき王様に会った後、俺の部屋にある男性が来たところから話そうか」

「プレッジのリーダー、リーディ様ですね？」

「そうですか・・・なにか用ですか？」

いきなりやって来たその男性は、藍色のぴしとした服を着た、いかにも軍人っぽい人だった。

男性は、エミルダと名乗ると、挨拶もそこそこにこんな事を言い出した。

「騎士団員とプレッジのメンバーの方で、模擬試合をしませんか？」
「・・・はあ？」

エミルダさん曰く、騎士団に『こんな子どもだけの集団が勇者だなんて認められない！』と言っている連中が居て、騎士団長に直談判

しに行ったらしい。

話を聞いてみると、喚び出された勇者全員が武術、あるいは魔法に秀でているわけではなく、一（当たり前だ）喚び出した国の軍人が師となる、ということが慣習としてあるらしい。

ここレインディア王国では、もちろん王堂騎士団がその役なのだが、一部の騎士たち曰く、『子どもに武術を教えるつもりはない』と。そこで話し合った結果、プレッジのメンバーと模擬試合をして、騎士団が負けたら教えてもいいと・・・。

「と、言うわけだ」

「・・・最後、若干言い分に飛躍がなかったか？」

早速クリスが突っ込んでます。確かに、どうして模擬試合をしたら教えてもよくなるのでしょうか？

「・・・そこまでは聞かなかった」

「しっかりしてよ。というか回想方式にする必要あったの？」

リン、気持ちは分かりますがメタな発言は控えてください。

「それで、さっきの質問になるわけか」

「だったら、ルーの魔術でやつつけちゃえばいいじゃん！」

えっ、えっ、私ですか？！

「スウとカームの言うとおりだよ。確かに、ここはルーを出すのが一番だろうね。

・・・一人は」

一人は？

「一人はつて・・・まさか、全員が出なけりやいけないのか？」

クルが、慌てたように言いました。・・・そりゃあ、慌てますよね。クル、運動苦手ですし。

「全員つて事はないけど・・・お互いに5人ずつ出し合つて、一騎打ちをするんだつて」

「5人か・・・」

まともに戦える人、そんなに居るんですか？

「とりあえず、ルーと俺とは決まりで・・・あと3人。誰かいなか？」

そう言つてリーディはぐるりと周りを見回します。すると・・・。

「じゃあ、私が」

「俺も・・・」

なんと、リンとクリスが手を上げました。意外ですね・・・。

「え、大丈夫なの？ ふたりとも」

「失敬な。こう見えても私、空手黒帯なんだよ？」

笑いながらリン。じゃあ、クリスは・・・？

「俺は一応、剣道部だから」

ああ、なるほど。・・・あれ？ でも。

「剣はどうするんですか？」

武器がないと、どうにもなりませんよね？

「ああ、武器は使っていないのを貸してくれるらしい。・・・さすがに刀はなさそうだが、剣ならいくらでもあるだろ」

なるほど。その辺は親切ですね。フェアプレイ精神でしょうか？

「あと1人、誰かいらない？ リンとクリストみたいに何か技術があるわけじゃなくてもいいんだけど」

「要するに、頭数合わせて事が。まあ、5人なら3人勝ちやあこつちの勝ちだもんな」

と、かるーく言うのはトリック、こと河隼 東。まあ、そうですねえ。

「・・・でないな」

「これは困ったね」

ティファとリーディは、困ったように顔を見合わせました。

「誰かいらないか？ さっき言ったように、ちょっと運動神経がいいとか、他の人にはできないことが出来るっていいけどいいんだが・・・」

他の人ができないことが出来るって・・・あ。

ふと気づいて、私はある人のところに視線を走らせました。
・・・よくみると、他の人も彼女のことを見ています。

「えっ、え、なに？」

「スウ・・・たしか、力強かったよね」

リンがそう言うのと、何のことだか気づいたスウちゃんは慌てだしました。

「ええっ、ぼ、ぼく?!」

「そうか、小柄で怪力なら、小回りが効く上に打撃したとき与えられるダメージが違うよな」

クルも、納得したように頷きます。

「スウ、頼めるか？」

リーディが、まっすぐとスウちゃんの目を見つめて言いました。

「んー・・・わかった。頑張ってみるよ！」

しばらく考え込んでいたようでしたが、にっこり笑って頷きました。
リーディも、嬉しそうに笑いました。

「よし！ 模擬試合まではあと10日。それまでに、出来ることはしておかないとな」

「例えば？」

スノウは、首をかしげます。それを聞いたリーディは、少し笑って

言いました。

「特訓とかな」

第八話（後書き）

提供していただいたオリキャラ、スマイル、トリック、ディシーを出してみました。

スマイル以外の二人は、出番が少なく、またレイさん提供のミストくんは登場できず、すみませんでした。

次あたりはもうちょっと出せると思います。

第九話（前書き）

かなり今さらですが、明けましておめでとつございます。

第九話

「と、特訓っ?!」

「ああ、もちろんだ。二人には悪いが、空手も剣道もあくまで趣味の範囲のことだ。」

相手は本物の軍人だぞ? ある程度は訓練したほうがいいだろ」

にやりと笑って、リーディ。というか・・・

「リーディは何が出来るんですか?」

「俺か? 俺は基本的には何も出来ない」

すぐにリーディは答えます。・・・って。

今、なんと? サラッとする恐ろしい事を言われたような・・・。

「だから、なんにもできないって」

「・・・はあっ?!」

全員がぎょつとした顔です。

え、え、えええっ?! ちょ、ちょっと待ってください! じゃあ、なんでさっき・・・?

「俺が出来るのは、せいぜい喧嘩ぐらいだな」

「ちょっと待てよ、じゃあ・・・どうするんだ?」

困惑して、ミストが尋ねます。本名朝霧 神楽、偽名はミスト・ル
イン・ユイミヤ・リアルタ・アサギリ。

・・・って、そんなの今関係ありません!

「リーダーが出たほうがいいだろ、こっぴつ。ティファは運動苦手だし」

「え、あ・・・そりゃそうだが」

明らかに、戸惑ってますね、みんな。かく言う私も、頭がくらくらくら・・・。

「だから、特訓は俺とスウ中心だな。他の3人に教わる形になるか・・・？」

そう言つて、確認するようにちらりとこっちを見ます。

・・・ああもうっ！

「分かりましたよ！ もう、しょうがないですね・・・」

「はいはい。いいけど、触りしか教えられないよ？」

「・・・はあ。めんどくさいなあ」

しびしび頷きます。えっと、私は魔術を教えるんでしょうか？とすると・・・。

「・・・えっと、リーディは魔力値580の「雷」属性、スウちゃんは320の「炎」属性ですね。

量と質は問題無いですから、後は自分の魔力を知覚して・・・時間もないですし、感覚で覚えるしかないですね」

「え、魔術教えてくれるの?！」

スウちゃんは目を丸くしていますが・・・。

「私に出来るのって、それぐらいですよ?」

それ以外、なにも思いつかないのですが・・・何かありましたっけ？
私が首をかしげていると、リンが思い出したように言いました。

「あれっ？　いつだったか、魔術なしで喧嘩してたよね？　高校生相手に」

「ああ、そういえば小学生の時に。確か箒使ってたよな？」

・・・あれっ？　ありましたっけ、そんなこと。
うーんと・・・あ、あれですか？

「もしかして、薙刀の事ですか？」
「薙刀っ?!」

最近は全然やってませんけど。もう、できなくなっちゃってますかね？

「ちょ、ルーって魔術以外にもできたの？」

「・・・だったら、出来れば魔術以外も使って勝って欲しいんだが」

ティファとリーディが驚いたように・・・って、今なんと？

「ええっ？　む、無理ですよ！　最後に練習したの、一体何年前だと・・・」

って、知る訳ないですか。でも、無理なもんは無理っ！

「なんか、ないのか？　身体能力を上げる魔術とか」

「・・・あるにはありますけど・・・」

どうしても、薙刀を使つて欲しいんですか？ どうして？

「どうしてもと言われると、印象の問題だな。魔術だけより、それ以外にも技能があることを見せたほうがいい」

「はあ・・・というか、今思考を読みませんでした？」

もう、いいですけど。薙刀、薙刀・・・ああ、【鍵】があつたら良かったのに。

でも、ないものねだりをして仕方ありません。

「鍵？ って、何？」

「簡単に言つと、魔法の杖です。形を自由に変えられて・・・って、また？」

もう、なんなんですか・・・？

「さあ、早速特訓だ。さつき通りすがりの侍女さんに、ちょっと壊しても大丈夫な広い場所聞いたから、そこ行くぞ」

そう言つて、先頭きつて歩き出すリーディ。

・・・さて、頑張りましょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9028m/>

40人の勇者様！

2011年1月19日20時24分発行